

佐渡米通信

こめる

2022年 6月号

発行日:2022年6月

編集人:佐渡農業協同組合 営農振興部販売企画課 駒形・渡辺(清)
jasadoeinoubu20@dune.ocn.ne.jp

田植え本格始動!

令和4年産米の田植えが5月上旬から本格的に始まりました。

4月初旬から播種作業が始まり、4月下旬には育苗作業が最盛期を迎えました。今春は急激に気温が上がったり冷え込んだりと、寒暖差が激しく育苗段階で生育が心配されましたが適切な温度管理を徹底したことで、丈夫な苗に育ちました。

初夏の日差しが注ぎカエルの声が聞こえる中、田植え機が通った後の田んぼには整然と苗の列が並びました。



田植えの様子

令和4年度 第2回おいしい佐渡米研究会 ～被覆肥料殻の水田外流出防止策についても検討～

今年度2回目の「おいしい佐渡米研究会」が開催されました。研究会では、品質・食味を向上させることに加え、被覆肥料(プラスチック等の被膜でコーティングした肥料)殻の水田外流出防止策の取り組みに向けた議論が行われました。その結果、今春から本格的にフィールド試験を開始することとなり、「プラスチック被膜を使用していない肥料による栽培試験」と「肥料殻の水田外流出防止ネットの設置」の2点を取り組むこととなりました。

現在多くの企業が温室効果ガス排出削減に取り組んでいますが、農業分野にも同様の取り組みが求められています。JA佐渡は、国が掲げる「みどりの食料システム戦略」が策定されるより前の平成18年から「環境にやさしい佐渡米づくり」に取り組んでおり、国内での持続可能な農業の先駆けとして各地から評価を頂いています。これからも化学農業や化学肥料の使用量を低減すること等で、温室効果ガスの排出減少にも繋げることに努力していきます。

JA佐渡は国の示す目標年度よりもいち早く達成できるよう努力し、サプライチェーン全体での温室効果ガス排出を減らすことでサステナブルな価値の向上につながることを期待しています。



被覆肥料殻が水田から流出するのを防ぐネットの設置について議論している様子

佐渡の米農家さんにインタビュー!!

JA佐渡管内輝く若手の農家さんとして、高橋祐作さん(24歳)にインタビューさせて頂きました。高橋さんは、小さい頃に農業機械のカッコよさに魅了され農業に興味を持ったそうです。農業についてもっと勉強したいと農業大学校へ進み、卒業後には専業農家として今日に至るそうです。

現在は合計8町歩(8ha)の田んぼで主に「朱鷺と暮らす郷認証米コシヒカリ」を作っています。除草剤を使用しないために夏場の草刈りや、朱鷺の餌場を確保するための江の設置など認証米ならではの大変さがありますが、収穫の喜びに向けて楽しく出来ていると語られていました。

日々の生育管理をするうえで、大学校で学んだ基礎がしっかりあることが品質への自信にも繋がっていると感じているそうです。1つ1つの行動や判断が、最終的なお米の品質に繋がります。日々変わる天候、それに伴う生育状況、最適な管理について試行錯誤はありますが、考えに基づき積み上げることで翌年のお米づくりに繋がっていきます。

「全量1等米で収量もしっかり確保し、佐渡米を応援して下さる皆さんに応えていきたい」と爽やかな笑顔を輝かせながら語られていました。

金北山の恵みに感謝!!

田んぼに水を引き入れる前に農家さんが佐渡の最高峰である金北山(1172m)に向かって二拍手一礼してから作業に取り掛かられていました。



田起こしを行うためにトラクターに乗り込む高橋さん

